

母子通園施設 A 教室を利用する保護者の困り感

A Survey about Difficulties in Day care center for mothers and disabled children

木村 拓磨

Takuma Kimura

〈摘要〉

本論は、障害を持つ幼児と母親がともに通園する、母子通園施設へ継続的な巡回相談を実施している筆者の実践活動内容を報告する。さらに、施設を利用する保護者の育児に対する困り感を報告するものである。筆者は、母子通園施設 A 教室にて、2010 年 4 月から 5 年間にわたり、教室を利用する保護者への支援および保育士へのスーパーヴァイズを実施し、現在も継続している。本論はその活動の中で、保護者への支援活動についてまとめた。

保護者への支援の内容は、保育場面の観察を参考にし、行動分析学をベースとした講義であった。講義のほか、日々の生活の中での困ったことに関する質問を自由記述で受け付けていた。その結果、「指示が入らない」が最も多く、次いで、「多動・衝動的な行動」、「スキルを教えたい」についてであった。また、巡回相談について、保護者からの感想を自由記述で回答を得た。その結果、「納得することがたくさんあった」が最も多く、次いで「子育てについて振り返った」、「いろいろ出来るようになった」、「子どもへの対応が変わった」といったものであった。今後は、巡回相談を継続するとともに、巡回相談による保護者の変化を明らかにすることが必要であると考えられた。また、個人の秘密が保たれるような場も準備していく必要があると思われた。

〈キーワード〉 障害 母子通園施設 保護者

I. はじめに

近年、障害を持っている子どもへの早期発見、早期療育の必要性が高まるとともに、障害を持つ子どもの保護者の支援も重要視されている。堀家（2014）は、昨今の障害児教育研究において、当事者への支援と同じぐらい、その兄弟や保護者へのサポートが重要なトピックになっていると述べている。現在、子どもの貧困問題や、児童虐待など、育児に関

して様々な問題があり、子ども、保護者ともストレスフルな社会になっていると考えられる。そのような社会情勢の中で、障害を持つ子どもの保護者は、子どもが障害を持っていることが判明した途端、「子どもの保護者」から、「障害を持った子の保護者」となる。そのストレスは非常に高いものであろうと考えられる。庄司（2007）は、障害のある子どもの母親、とりわけ発達障害のある子どもの母親の抱える育児ストレスは高いことを明らかとしている。発達障害をもっている子どもの保護者の子育てにおける育てにくさと困っていることに関して、山原ら（2014）は、発達障害をもち、親子教室等に通う保護者に自由記述によるアンケートを実施している。その結果、育てにくいことに関して、「自己主張が強い・指示が入らない」、「多動・衝動的に行動する」、「子育て環境に関すること」、「痲癩」、「特になし」が、順に多かった。困っていることに関しては、「自己主張が強い・指示が入らない」、「子育て環境に関すること」、「特になし」、「発達の遅れ」、「他児とのトラブル・集団での関わり」、「多動・衝動的に行動する」が順に多い結果が得られている。岩崎ら（2009）はそうしたストレスにさらされている保護者に対し、心理的支援の必要性・情報提供の重要性・保護者役割から離れる時間を確保する必要性を指摘している。大鐘は、障害児とその保護者が利用する母子通園施設において、保護者らの手記から、入園児、通園中、卒園時の保護者の気持ちの変化を示している。その結果、母親は子育てや障害に関して様々な葛藤を抱いていたが、第三者からのサポートを感じ、子どもへの共感性を促進させていることが明らかとなり、母親がサポートを受けている気持ちを持てるように支援する必要があると述べている（大鐘、2011）。また、日本では発達障害児の親の支援として、行動分析学をもとにした行動論的なペアレントトレーニングが多く実施されている。国立肥前療養所（現、独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター）のスタッフを中心とする研究チームによって、障害のある幼児をもつ親を対象にした実践的な指導プログラム（肥前方式親訓練：Hizen Parenting Skill Training：HPST）（山上、1998）が紹介されている。

本研究では、母子通園施設に通園している障害を持つ子どもの保護者を対象に、子育ての中での困ったことや悩んでいることについて明らかにし、支援を受けた感想から今後の巡回相談について方向性を見出すことを目的とした。

II. 母子通園施設 A 教室について

母子通園施設 A 教室は、B 町にある C 保育園内で就園前の 1 歳 6 か月から 5 歳までの発達に遅れが疑われる幼児を対象に、早期より適切な療育を行い、全体的な発達を促し基本的な生活習慣の自立を目的に活動している。

A 教室の幼児の定員は 10 名で、保育士は 3 名、施設長 1 名が職員として勤務していた。C 保育園内の 1 室を利用し、母子あるいは父子で通園している。保育士とともに子どもと

の遊び方や、子どもと一緒に昼食をとる中での食事場面での対応の仕方、着替え、排泄訓練などが行われている。母親は、保育士から家庭での子どもの発達支援の仕方について相談、助言を受け、A 教室にて実際に子どもと活動をともにしている。なお、2015 年 4 月からは、発達支援センターとなり、幼児単独支援の教室も開設され、定員も増加している。

A 教室での 1 日の流れは、母子の登園後、朝の会を実施し、作業療法に基づいた感覚運動や、創作活動などを実施し、昼食をとる。その後、帰りの会を実施し、母親とともに帰宅するといった活動内容である。活動の細部においては、幼児の発達段階に合わせ Picture Exchange Communication System (PECS) を用いたコミュニケーション支援や、スケジュールカードを用いた視覚支援、見通しを持った活動を実施している。A 教室の保育士は積極的に障害児に関する外部の専門家による研修を受講し、支援に取り入れるなど障害児への支援に対して真摯に活動していた。

Ⅲ. A 教室を利用している幼児

2010 年 4 月から 2014 年 3 月の間に母子通園施設である A 教室を利用したのは 22 名の幼児と保護者であった。幼児の診断名に関して表 1 に示した。診断はそれぞれ、自閉症スペクトラム障害 13 名、ダウン症候群 4 名、レット症候群 1 名、脳瘤 1 名、脳炎 1 名、未受診 2 名であった。さらに、全例において、知的障害及び、知的障害の疑いがみられた。

Ⅳ. A 教室での筆者の活動について

筆者は A 教室から発達にアンバランスを持つ幼児の支援の仕方について、保育士と保護者に指導してもらいたいと依頼を受けた。そのため、2010 年 4 月より A 教室にて年に 10 回程度、A 教室を利用する保護者と子どもの様子の観察と、観察をもとに保護者への応用行動分析学に基づいた子どもの理解と対応に関する講義を実施している。さらに保育士へのスーパーヴァイズを実施している。

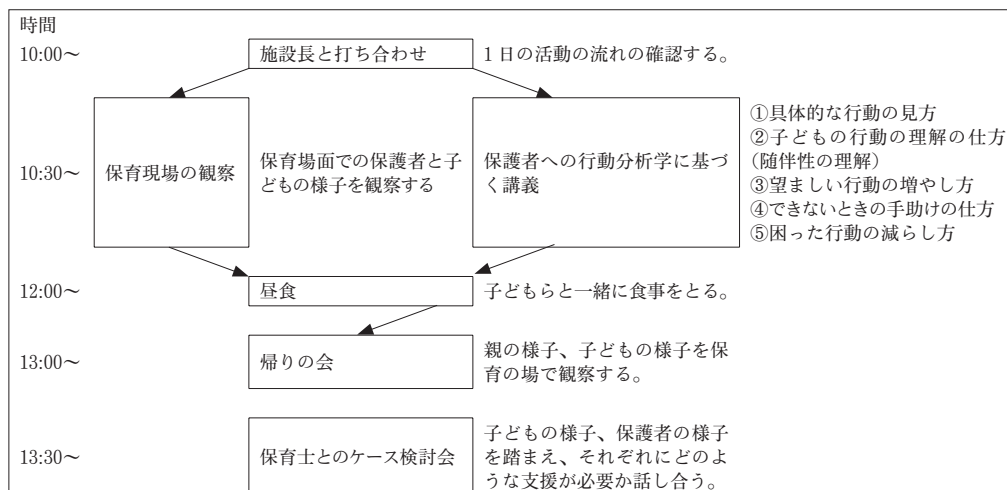
表 1. 対象児の診断名

診断名	人数 (名)
自閉症スペクトラム障害	13
ダウン症	4
レット症	1
脳瘤	1
脳炎	1
未受診	2

保護者への講義の内容としては、①具体的な行動の見方、②子どもの行動の理解の仕方（随伴性の理解）、③望ましい行動の増やし方、④できないときの手助けの仕方、⑤困った行動の減らし方である。講義外では、実際に教室での幼児の様子を観察し、保護者の子育てに関する悩みや疑問を聞いている。

筆者が訪れた時の活動の流れを表 2 に示した。筆者の活動は、大きく分けて 2 種類に分けることができた。

表 2. 筆者の A 教室での活動内容とながれ



活動の内容としては、保護者への講義と、保育場面での自然観察であった。

V. 保護者からの質問内容

活動を継続している中で、講義や保育現場にて、保護者からの困ったことや悩みなどの質問が出てきたが、質問をする保護者がある程度決まっており、保護者全員からのニーズを汲み上げられているか疑問があった。そのため、A 教室施設長との話し合いから、幅広く保護者の悩みを汲み上げることを目的に、A 教室の園長が A 教室を利用している保護者に対して、育児に関して困っていることはないかアンケート用紙を配布するようになった。2011 年には、1 月（7 名回答）、2 月（6 名回答）、7 月（5 名回答）、10 月（5 名回答）の 4 回アンケートを実施し、2012 年には 7 月（2 名回答）の 1 回、2013 年は 7 月（6 名回答）の 1 回、2014 年は 9 月（9 名回答）の 1 回実施した。合計 7 回実施されたアンケートすべてを分析の対象とした。分析の仕方は、自由記述により得られた質問内容を 1 文で区切り、筆者への感謝の言葉（ありがとうございました）は分析対象外とした。以上の手続きにより得られた質問内容は 60 個となった。さらに、得られた質問内容について類似したものについて筆者が分類を行った。その結果、質問があった内容を表 3 に示した。「指示が入らない」が 15 名と最も多く、次いで、「多動・衝動的な行動」、「スキルを教えたい」が 8 名ずつ質問していた。さらに、「暴力・暴言」、「痲癩」、「発達の遅れ」、「困った癖」といった質問が 5 名ずつ見られた。

表 3 質問内容と回答人数

質問内容	人数(名)
指示が入らない	15
多動・衝動的な行動	8
スキルを教えたい	8
暴力・暴言	5
癩癩	5
発達の遅れ	5
困った癖	5
子どもの理解や対応の仕方を知りたい	3
偏った食事	2
人見知り・場所みしり	2
習い事について	1
他人の邪魔をする	1

※重複回答あり

表 4 保護者支援を受けた感想について

カテゴリ内容	人数(名)
納得することがたくさんあった	8
子育てについて振り返った	6
子どもがいろいろと出来るようになった	4
子どもへの対応が変わった	4
相談できてよかった	3
子どもについて理解できた	2
ほめる重要さに気づいた	2
親として自信が付き成長できた	2
子育てでイライラしてしまう	2
対応できるようになりたい	2
楽しみながら子育てしたい	1
他母親との交流もありよかった	1
子どもの笑顔がふえた	1
子どもが仲良く過ごせた	1

※重複回答あり

VI. 講義などを受けての感想

2013年と、2014年の年度の最後に、保護者支援を受けての感想を保護者から自由記述により回答を得た。回答人数は2013年、2014年とも10名ずつの計20名であった。得られた回答を一文にし、筆者へのねぎらいの言葉（ありがとうございます）、子どもの報告（卒業しました）を除いた結果、39個の感想が得られた。それらを筆者がカテゴリ分けを行った。2名以上回答のあった感想について表4に示した。「納得することがたくさんあった」が最も多く、8名見られた。次いで「子育てについて振り返った」が5名、「子どもがいろいろと出来るようになった」、「子どもへの対応が変わった」といった回答がそれぞれ4名ずつであった。

VII. 考察と今後の支援活動

本論は、母子通園施設へ継続的な巡回相談を実施している筆者の実践活動内容を報告したものである。A教室を利用している幼児はみな、知的な障害を持っているか、あるいは疑われている幼児であり、自閉症スペクトラムと診断されている幼児が最も多かった。活動では、幼児への直接的な支援よりも、保護者に対して子ども理解を促し、対応を教えることが主であった。活動の中で、A教室の施設長からの提案で保護者からの子育てに関する悩みや困ったことを幅広く聞けるよう、保護者に対して自由記述によるアンケートを実施した。その内容について分析を行った結果、「指示が入らない」、「多動・衝動的な行動」、「子どもにスキルを教えたい」といった質問内容が多く、対応を必要としているこ

とが明らかとなった。保護者がサポートを感じるためには、これらのような質問に専門家の立場から回答し、相談に乗れることが必要だといえる。また、山原ら（2014）では、「子育て環境に関すること」が保護者の困り感で上位にあった。しかし、本論では、子育て環境に関する質問内容は一つも見られなかった。このことに関して、以下の2つの理由が考えられる。1つは、アンケートを行った側が、保護者へ実際に支援を行っているため、具体的に困っている子どもの行動に関する質問に偏ったと考えられる。もう1つは、A教室では保護者支援を積極的に行っており、A教室を利用している保護者は相談を行いやすい環境であった。そのことから子育て環境については、十分に支援を受けることができたとも考えられた。このことは、自由記述での感想においても、「相談できてよかった」、「他母親との交流もありよかった」といったものもあり、支援を受けやすい環境であったとも考えられる。

保護者に対して、巡回相談を通じての感想を自由記述により回答を得た結果、「納得することがあった」、「子育てについて振り返った」、「子どもがいろいろ出来るようになった」、「子どもへの対応が変わった」とポジティブな感想が多かった。本論のアンケート結果では、子どもや保護者が具体的にどのように変化したのかは明らかにできない。しかし、ある一定の効果があったとはいえるだろう。今後も活動を継続していくことで、筆者の支援活動により、保護者のどのような点が変わったのかを明らかにする必要があると思われる。

本論の結果から、保護者の困っていることについて把握することができた。しかし、保護者から相談を受けて、その後どのように子どもへの支援に活かされたか詳細を知ることは困難であった。そのことから、実際の講義や、保護者からの質問に対してアドバイスをした内容が、保護者の子育てにどのような効果をもたらしたのか、個々のケースを検討する必要がある。また、集団での講義や質問の受付に関して、他の母親との交流を促進するといった効果も考えられたが、個々の悩みを他の保護者の前で明らかにすることに抵抗を示す保護者もいると思われる。今後の支援活動については、個々のニーズにも注目し、集団での支援の場と、秘密が保たれる個人での支援の場の両方を提供していく必要があると思われる。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた母子通園施設（現発達支援センター）の施設長ならびに、職員方に対して感謝いたします。記して謝意を表す次第である。

【引用・参考文献】

- 1) 堀家由妃代（2014）発達障害児の親支援に関する一考察、佛教大学教育学部学会紀要、13、65-78.
- 2) 庄司妃佐（2007）軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親の育児不安調査、発達障害研究、第29巻、第5号、349-358.
- 3) 山原麻郁、小枝達也（2014）親子教室等に通う保護者の育てにくさ・困り感に関する研究、地域学論

集：鳥取大学地域学部紀要、第 11 巻、第 1 号、31-43.

- 4) 岩崎久志、海蔵寺陽子（2009）軽度発達障害児をもつ母親への支援、流通科学大学論集 人間・社会・自然編、第 22 巻、第 1 号、43-53.
- 5) 大鐘啓伸（2011）母子通園施設を利用した母親の心理状態：支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから、発達心理学研究、第 22 巻、第 3 号、308-317.
- 6) 山上敏子（監修）（1998）お母さんの学習室、二瓶社.